優秀賞　中学生部門〈言葉の力〉

しあわせのつくり方

国立静岡大学教育学部附属静岡中学校 1年
杉山　楽奈

はじめて小説を書いたとき、心から生かされていると思った。

十代は色々あると思う。それは素敵なことだったり。時に、どうしようもなく苦しいことだったりする。

私は小学校二年生から四年生の間まで外国に住んでいた。そこには、悪口も、グループもなかった。だから、日本の小学校に来て、悪口でむすばれあって構成されているような仲良しグループがあることを知った時は本当におどろいた。

私は正直、あの人大嫌い、とつよく思うこともないし、それを共有できる相手を友人とみなすことにどこか抵抗があった。そのせいか、学校に上手く馴染むことができなかった。

意見を言っても、歌を歌っても、絵を描いてもみんな私を変わってるとかおかしいと言った。私は普通にしているつもりなのにまわりが理解してくれない。いつもそれが苦しくてたまらなかった。

この苦しさから解放されたくて、ある日、半ば衝動的に机に向かって物語を書いた。物語を書きながら、

「紙の中でなら息ができる」

そう思った。自分のおもいを言葉にあらわすことがここまで魅力的な事だとは思わなかった。今まで「変わっている」と言われることをおそれて言葉にすることのできなかった気持ちは、とどまることなく出てきて終わることを知らないかのようだった。

一語一句、気持ちを忠実に表現することで一つ、また一つ苦悩が消えていくようだった。言葉って何て素敵なんだろう、文章にすることって何て愉しいのだろう。心の底からそう思った。

今まで私を苦しめていたものが全て取り払われた気がした。しあわせをかみしめるというのは、こういう気持ちなんだなと思った。

言葉にあらわすこと。それは、しあわせを作る手段の一つなのだと思う。